

女性のための登山初心者向けエコツアーの企画・運営 ～飯能市の事例から～

平井純子

I. はじめに

埼玉県飯能市は「エコツーリズムのまち」である。2004年に環境省によるエコツーリズムモデル地区に選定されて以降、2008年に第4回エコツーリズム大賞受賞、2009年にエコツーリズム推進全体構想認定全国第一号、2015年にはエコツーリズム推進全体構想再認定全国第一号と、エコツーリズムの先駆的な取り組みに力を入れており、里地里山型エコツーリズムの先進地として注目されている。メディアに取り上げられることが増え、「飯能モデル」と称されるまでになっている¹。

飯能市で実施するエコツアーは、2015年は38の団体により108ツアーが行われ、その内容は、自然、歴史、文化、生活など多岐にわたる。参加者のリピーター率は50%ほどで、50～60代の女性が多い傾向にある。

エコツーリズムを持続的なものとするため、飯能市エコツーリズム推進協議会では、リピーターの確保のために、同じコンセプトのシリーズで実施することや新しい顧客を獲得するため、若年層に向けた新しいタイプのアクティビティを取り入れたエコツアーを実施することなどを課題としている。

この課題をクリアすべく、2013年4月に始まったのが、「ヤマムスメが行く」シリーズである。「山ガール」という社会現象が起こっている中、初心者の女性をターゲットとする登山目的のツアーはみられるが、ガイドは男性であることが多い。本シリーズは、ガイドもすべて女性が行うエコツアーである。

本稿では、「ヤマムスメが行く」シリーズの概要とこれまでに行われたエコツアーの内容を検証し、その成果と今後の課題について考察する。

II. 飯能市と「山ガール」について

2014年の飯能市の観光入込客数²は2,129,439人であった。そのうち、登山やハイキング目的は50万人ほどとなっている。飯能市内には西武池袋線、西武秩父線とJR八高線が乗り入れており、7つの駅があるが、週末や休日には朝早くからアウトドアウェアに身を包んだ人々が電車から降り、それぞれに山を目指して歩いてゆく。日本生産性本部の「レジャー白書2013」によると、登山の参加人口³は12年に860万人で、前年比50万人の増加となっている。健康増進を目的に登山をする60代以上を中心に増加しているが、中にはファッション性を重視した「山ガール」もみられる。

「山ガール」という語を耳にするようになって久しいが、佐々木(2014)によると、山ガール誕生には複層的な潮流がみられるという。すなわち、2000年ごろからの「エコ」、「ロハス」、「オーガニック」、「スローライフ」といった環境意識の高まり、2003年ごろからの「ヨガ」「ランニング」といった健康・フィットネス志向と、これらの活動にともなったアウトドアファッションの開発と多様化である。これらとは別の流れで、2008年ごろからはパワースポットや自然のつくりだす聖地参拝行動が、「山ガール」の誕生に拍車をかけた、という。

「山ガール」という言葉を探してみると、2009年6月に女性向けのアウトドア専門雑誌「ランドネ」が創刊され、雑誌やテレビといったメディアに登場し始めるようになり、2010年4月に登山家の田部井淳子が「田部井淳子のはじめの！山ガール」を、続く5月にJTBパブリッシングが「山ガールデビュー はじめての山登り 関東版」を出版している。新聞紙上には「山ガール」という語が、2010年8

月7日に読売新聞に「(山ガールという言葉)最近になって知った」、同25日に朝日新聞に『山ガール』という言葉まで生まれるようになった」と出てくる。「山ガール」という語感の良さもあいまって、急速に広まり、2010年のユーキャン新語・流行語大賞の候補ともなった。2006年ごろに登場した「森ガール」という語があるが、これは「森の中にいるみたいな服装をした子」を指すもので、実際に森に入ったり森で暮らしたりしているわけではない。山に登る、という実態を伴った「山ガール」は、その後に登場する「〇〇ガール」⁴のなかでは、最も早い時期のものである。

Ⅲ. 「ヤマムスメが行く」の基本的な考え方と方針

飯能市エコツーリズム活動市民の会⁵に所属するエコツアーガイドの中で、「女性による、女性のための登山ガイド」企画に賛同した4名の女性が集合し、2013年1月7日に山ガールを対象としたエコツアーの作戦会議が実施され、以後、実行委員会を立ち上げて活動していくこととなった。ここで確認されたターゲットや基本概念は、以下の点である。

- ①山ガールあるいは登山に関心がある女性で登山初心者向けであること
- ②山での正しい知識・ルールを伝授すること
- ③楽しみながら環境教育を意識したガイドを行うこと
- ④山ごはんのおいしさを知ってもらうとともに地産地消に努めること
- ⑤ツアー中にできる限り立ち寄りを盛り込み、地元への波及効果を高めること

これらの考え方を実践するため、2か月に一回の



図1 「ヤマムスメが行く」のロゴマーク

ペースでシリーズ化することとし、年間スケジュールを組んだ。1年サイクルで初心者が徐々に山に親しんでいけるよう、各回に明確なコンセプトを提示し、開始は一般的に何かを始めたいと思いやすい4月とした。

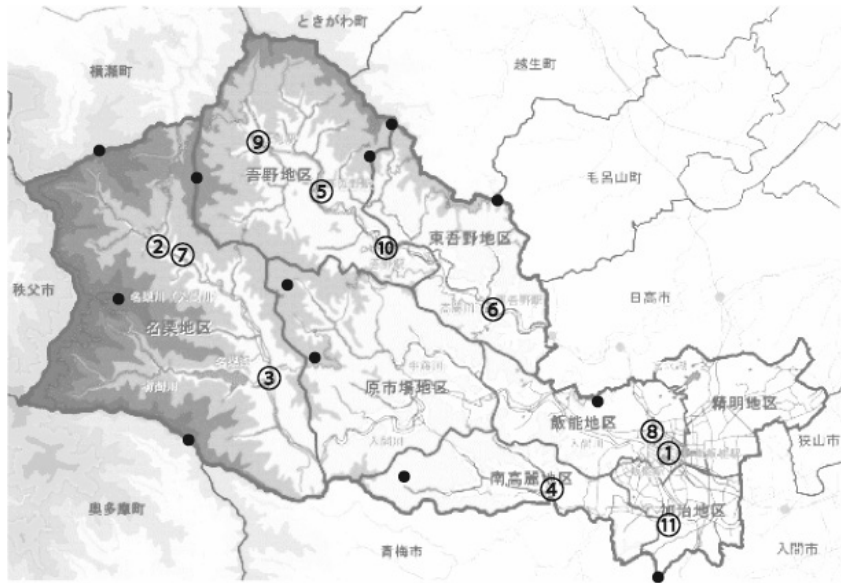
シリーズ化するネーミングについては、飯能市を舞台にしたアニメで、2013年1月からテレビアニメ化された「ヤマノススメ」を意識しつつ、「山ガール」をも取り込む形で、「ヤマムスメが行く」とした。ツアータイトルについては、女性が好みそうなコピーを盛り込むことを意識し、「場所 de 〇〇&△△」と統一したものとした。また、分かりやすさと独自化に向けて、ロゴマーク(図1)を作成し、ツアー時はロゴマークをつけたTシャツを着用した。

エコツアー実施場所については、飯能市エコツーリズム推進全体構想が掲げる基本方針のひとつである「すべての地域と住民の参加により、地元への誇りと愛着を育みます」に基づき、山や丘陵があるすべての地区で実施することを目標とした。11回までにすべての地区での実施を実現している(図2)。

参加費については、第1回の vol.1については、手ごろ感をもってもらうため2,000円とし、vol.2からは2,500円とした。その後、アンケート結果や毎回同行する飯能市職員などの意見を反映し、2年目に入った2014年度からは、500円値上げし、3,000円とした。表1は2013年4月から2015年1月までの11回の実施日とタイトル、参加者数などを示したものである。募集人数については、vol.1とvol.2では15名としたが、自然への負荷の軽減と安全管理面を考慮し、vol.3からは10名としている。vol.2までは参加者数が伸び悩んでいたものの、vol.3以降は募集人数を上回る応募がみられるようになり⁶、以後 vol.11まで続いた。このため、登山者が多くないフィールドであったり、シーズンオフであったりした際は、募集人数を越える参加者を受け入れることとした。

立ち寄り先は、カフェが4回、温泉2回、民家2回、その他1回で、初回以外で実施した。

女性のための登山初心者向けエコツアーの企画・運営
～飯能市の事例から～



数字はそれぞれのエコツアー出発地を、●は目的地や通過地点を示す

図2 「ヤマムスメが行く」 実施箇所

表1：「ヤマムスメが行く」実施一覧

実施年月日	Vol.	ツアー名	募集 定員	参加 者数	参加費	立ち寄 り先
2013.5.12(日)	vol.1	飯能アルプス de おいしい山ごはん	15	8	¥2,000	なし
2013.6.2(日)	vol.2	武川岳 de プチ岩登り&山カフェ♪	15	6	¥2,500	カフェ
2013.8.4(日)	vol.3	棒ノ嶺 de マイナスイオン浴&温泉♨	10	8	¥2,500	温泉
2013.10.6(日)	vol.4	南高麗 de 神様の木&山の暮らし	10	14	¥2,500	民家
2013.12.15(日)	vol.5	高山不動 de 年末詣&絶景ランチ!	10	10	¥2,500	カフェ
2014.3.9(日)	vol.6	顔振峠 de ウメ花見&春色山ごはん	10	11	¥2,500	温泉
2014.5.11(日)	vol.7	蕨山 de 新緑&山イタリアン♪	10	11	¥3,000	カフェ
荒天中止【2014.7.20 (日)荒天で順延, 8.10 (日)荒天で中止】	vol.8	飯能アルプス de ご来光&ブレイクファースト♪	10	-	¥3,000	-
2014.9.14(日)	vol.9	伊豆ヶ岳 de プチ縦走&コミーダス!	10	10	¥3,000	地元フ ルーツ
2014.11.23(日)	vol.10	子の権現 de 紅葉&秋香る山ごはん♪	10	12	¥3,000	カフェ
2015.1.25(日)	vol.11	阿須丘陵 de 古の道&ぽかぽか山ごはん	10	15	¥3,000	民家

IV. 「ヤマムスメが行く」の実施状況

「ヤマムスメが行く」実行委員会のメンバーは、登山用品販売店に勤務する30代と森林インストラクターの40代の2名がメインガイドを行い、飯能生まれ・育ちの20代と30代の2名が安全管理やツアーのサポートを担った。メインガイドのスケジュールを中心にツアー日程を決定したため、必ずしも4名がツアーに関わったわけではない。他に、毎回、飯能市エコツーリズム推進協議会事務局からの同行があった。1回のツアー開催にあたり、下見を最低2回行い、安全管理を徹底した。

以下、初回と、立ち寄り先別に代表的なツアーの様子を取り上げ、参与観察とアンケート結果をもとにツアーの概要をみていく。

1. ヤマムスメが行く vol.1 飯能アルプス de おいしい山ごはん

第1回は2013年4月7日(日)に予定したが、荒天のため、5月12日(日)に順延した。企画・協議シートに記載された概要によると、「飯能は年間50万人以上のハイキングや登山客が訪れる魅力ある地である。最近では「山ガール」と呼ばれる女性が多く訪れており、また、飯能を舞台としたアニメ「ヤマノススメ」が始まったこともあり、今後もその増加が期待できる。そこで女性を対象に、アウトドアクッキングなどの山の楽しみ方と自然をレクチャーすることで、「山ガール」人口を増やす手助けをし、ひいては飯能ファンを創出するためのエコツアーを企画した。「ヤマムスメが行く」としてシリーズ物とし、今回は初心者編として、「飯能アルプス」の一部、天覧山～多峯主山のルートをとる。」と述べられている。

当日のルートは飯能駅北口から市民会館、能仁寺、天覧山、多峯主山へと向かい、雨乞いの池にある東屋でランチを作り、中央公園で解散する、歩行距離約7km、高低差160mほどのルートである。飯能駅からは飯能市街地を通り抜けるが、林業で繁栄したところの名残を垣間見ることができる。また市民会館の前では、天覧山を眺めつつ、簡単な地図読みを行った(写真1)。能仁寺では鎮守の



写真1：地図読みをするゲスト



写真2：谷津田で里山保全の意味を解説



写真3：バーナーを使って料理をする

森での生き物たちの痕跡に触れ、谷津田ではトラスト運動について理解を深めた(写真2)。天覧山山頂では、このエコツアーのタイトルでもある「飯能アルプス」について説明し、北側の尾根ルートを通して、多峯主山へと向かった。途中傾斜がや

やきつくなる箇所があったが、参加者は概ね順調であった。多峯主山山頂で眺望を楽しんだ後、ランチづくりを行った。ガスやバーナーをはじめを使うという人がほとんどであり、器具を持っている人もほとんどいないため、4チームに分かれ、ガイドが指導のもと、「春野菜とニョッキの具たくさんシチュー」を作成した(写真3)。具材は地元のJA などから購入し、料理しやすいサイズに切ったものを配布した。その際、手順が分かるよう、名刺大のラミネートをしたレシピカードを配布し、カードを集める楽しみも付加した(写真4)。

参加者アンケートを見ると、参加者は8名で、30代が2名、40代が4名、50代と60代がそれぞれ1名であった。職業を見ると、会社員が4名となっており、公務員1名、専業職1名、その他2名となっている。はじめて飯能市主催のエコツアーに参加した人は5名であった。特に良かった点として、ガイドの説明が具体的で参考になった、スタッフの対応の良さ、食事の下ごしらえへの感謝などがあげられた。また、ルートについては、ちょうど良い負荷であった、最後の上り坂がきつく、普段の運動不足がばれた、ごはんがおいしかったなど、概ね好印象であった。参加費についてはとても安いのが4名、ちょうど良いのが4名となった。



写真4：レシピカード

2. ヤマムスメが行く vol.3 棒ノ嶺でマイナスイオン浴&温泉♨️(立ち寄り先：温泉)

2013年8月4日は、飯能市名栗地区で実施した。企画・協議シートの概要によると、盛夏の低山登山は厳しいため、「ヤマムスメシリーズ vol.3。今回は沢沿いを進み滝を見るコースで夏を乗り切る、清涼感たっぷりのエコツアーとした。棒ノ嶺は標高969mの山であり、登山道では藤懸の滝や天狗の滝などが次々と現れ、マイナスイオンが十分に浴びられる。頂上は眺望良好であり、山クッキング&お茶するには十分なスペースがある。また、帰りにはさわらびの湯へ案内する。飯能の自然を適正に利用しつつ、バスの利用を促進し、地域食材を使った山ごはん作り、そして地元施設の利用をすることで、地域経済振興に貢献できるエコツアーである。」とある。

飯能市内の中山間地区ではバスの存続については死活問題となっており、利用の促進がエコリズム推進の上で、重要なミッションともなっているため、飯能駅からさわらびの湯までの間は国際興業株式会社の運営する定期バスの利用を呼び掛けた。このツアーの帰りには飯能市の観光資源の一つである温泉施設へ案内した。

気温が高く、熱中症を気遣いながら、また、参加者の体力レベルが一定ではないため、不安を感じながらの登山となったが(写真5)、山頂では参加者が冷製パスタ(写真6)を作って食べ、休憩を兼ねた自然のレクチャー(写真7)などを聞きながら、事故なく最終地点の温泉施設さわらびの湯まで到達した。

参加者アンケートによると、参加者は8名で、20代1名、30代2名、40代3名、50、60代がそれぞれ1名であり、会社員が半数を占めた。参加費について、とても安いのが2名、ちょうど良いのが6名となった。自由意見として、ごはんは飯能の野菜を使うのがよかった、ペースがちょうどよく疲れなかった、人数がちょうどよかった、きつかったけど楽しかった、100点です、と評価が高かった。



写真5：湿った沢沿いの登山道を歩く

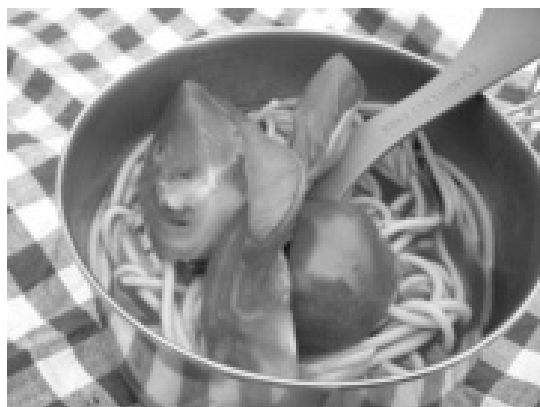


写真6：山頂で作った飯能野菜の冷製パスタ



写真7：休憩を兼ねた自然のガイド

3. ヤマムスメが行く vol.4 南高麗 de 神様の木 & 山の暮らし(立ち寄り先：民家)

2013年10月5日(日), 飯能市の南部に位置する南高麗地区で実施した。企画・協議シートによると、

「ヤマムスメシリーズ vol.4。今回は南高麗で樹齢700年と伝えられるタブノキを訪ね、黒指から細田、細田から大仁田山へと向かうコースをとる。大仁田山からの帰り道では、細田の名家である中村家を訪ね、縁側に座って山での暮らしについて、お話をいただく。飯能の自然を適正に利用しつつ、バスの利用を促進し、山頂では山の楽しみのひとつでもある地域食材を使った山ごはん作り、そして地域の方のお宅を訪問することで、飯能の地域理解を醸成し、ひいては地域経済振興に貢献できるエコツアーである。」とある。

このツアーの特徴に、中山間地域の民家への訪問がある。地元住民との交流を目的とし、当地で毎年2回行われているエコツアー「お散歩マーケット」⁷への誘導も視野に入れた。

地域にまつわる歴史や文化や自生する植物の解説などを挟みながら、集合場所から30分ほど歩くと樹齢700年というタブノキに到着(写真8)。スピリチュアルな巨木に参加者は圧倒されたのち、間野・黒指地区で、急斜面に張り付くようにして立つ民家や畑を眺めつつ、標高500mほどの大仁田山を目指した。途中で、立ち寄り民家の主人と落ち合い(写真9)、当該地域の歴史や文化、自然についてガイドをしてもらいながら歩いた。スカイツリーを臨む絶景の畑で地元のうどんを使った肉うどんを作って食べた(写真10)。



写真8：タブノキの巨木



写真9：地元の中村さんがガイド



写真10：肉うどんを作る



写真11：地元の中村さんのお家で寛ぐ

食後は大仁田山山頂に向かうか、民家に早めに行っておはぎづくりをするかを選択してもらった。中村さん宅でお茶をいただきつつ、参加者が中村夫人と作成したおはぎをいただきながら、山の暮

らしについて耳を傾けた。

参加者アンケートによると、参加者は14名で40代が5名、30、50、60代が2名ずつ、20代が1名となっており⁸、40代が最も多くなっていた。また、7名が会社員であった。飯能市の実施するエコツアーへの参加歴を見ると、5名が初めての参加、2回、3回が各3名となっていた。特に良かった点として、地元産食材を使った食事づくりやおやつがよかった、企画者の心配りがよい、地域の人々の笑顔にたくさん会えた、地元の方の暮らしを垣間見ることができたなど、があげられた。

4. ヤマムスメが行く vol.7 蕨山 de 新緑&山イタリアント(立ち寄り先：カフェ)

2014年5月11日(日)に飯能市名栗地区で実施した。2年目に入り、価格を見直した最初のエコツアーとなった。企画・協議シートによると、「2年目に突入したヤマムスメシリーズの vol.7。今回は蕨山に挑戦します。新緑を楽しみ、山頂付近では地元食材を使った山ごはんをゲストとともに作ります。帰りは鳥首峠を經由、廃集落である白岩地区を歩き、中山間地域での問題を考えます。下山後は、蔵カフェで美味しいコーヒーとプチデザートとともに地元の方とのコミュニケーションを図ります。飯能の自然を適正利用しつつ、公共交通機関を利用、地産地消、そして地元施設を利用することで、飯能の地域理解を醸成、ひいては地域経済振興、飯能ファンの創出を目指していきます。」となっている。vol.2でも利用し、評判のよかった蔵を利用したカフェ紗蔵に立ち寄っている。

新緑の季節で、ガクウツギやミツバツツジなど花が多くみられ、気持ちが良い山歩きとなった(写真12)。小休止のときには、名栗の概要や地図読み、森林についての基礎知識などの解説を行った。蕨山山頂では恒例となったアウトドアクッキング(写真13)。パーニャカウダ⁹作りに挑戦、飯能市が取り組む「じゃがいも・のらぼう街道」にちなみ、新じゃがとノラボウを含む地元産野菜と地元のパン屋で購入したフランスパンをバーナーで温めたソースでいただいた。

帰りは沢の水で疲れを癒しつつ(写真14), 名栗地区の白岩集落跡を見学, 放棄された集落の現状を知ること, 中山間地域の問題についても考えてもらった。カフェに立ち寄ったあとは, バス停で見送りをした。

参加者アンケートを見ると, 参加者11名中40代が6名と最も多く, 次いで30代の4名, 20代1名であった。会社員が10名, 公務員が1名となった。エコツアーの参加歴を見ると, 5回以上が5名, 2~4回が各1名, はじめてが2名となり, リピーターが多くなっていることが分かる。

自由意見として, 一生懸命登った後の達成感がうれしい, みなさんととても話やすく, ごはんがすごく美味しかった, 家でもつくらないメニューをまさか山頂で食べられると思わなかったのでうれしかった, 山頂に行けてよかった, 山頂ランチがととてもおいしかった, 顔見知りが増えてととてもとても楽しい, などの意見が寄せられている。

この回から参加費を500円値上げしたが, ちょうどいいと答えた人が8名, すこし安いと1名, とても安いと2名となっており, 値上げによる影響は見られなかった。



写真13 バーニャカウダを食べる



写真14 沢の水で疲れを癒すゲストたち



写真12 岩場を登るゲストたち

V. シリーズ型エコツアー「ヤマムスメが行く」の成果と今後の課題

シリーズ型エコツアー「ヤマムスメが行く」は2013年4月から2015年1月までに11回のツアーを行い, 延べ参加人数は105名であった。飯能市のエコツアー参加者の最多年齢層は50~60代の女性であったが, 本シリーズでは30~40代が全体の70%を占めた(図3)。回を重ねるごとに飯能市のエコツアー参加回数が増えていることから, また, 自由意見の中に, 「いつもありがとうございます」や「今回も楽しかった」との記載があることから, 複数回参加しているリピーターが増加したことが分かる。当初の狙いであった, シリーズ型で, 従来よりも若年層を取り込む新しいタイプのエコツアーの実現という点では, 成功したといえよう。

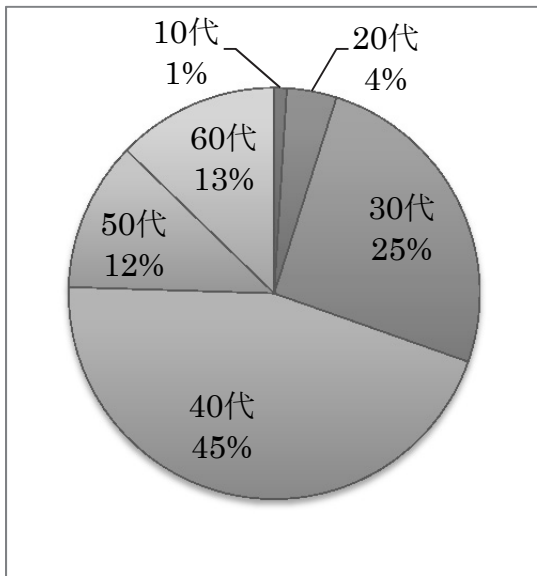


図3：「ヤマムスメが行く」参加者の年齢

「ヤマムスメが行く」シリーズでは、当初設定した基本概念を忠実に遂行したほか、運営していく中で、下記のような、「おもてなし」を感じてもらおう仕組みを取り入れていた。

①ランチのレシピカードの配布

写真4のようにツアー中のアウトドアクッキングの際に分かりやすいように、またツアー参加後に個人で登山をした際に使いやすいよう、ラミネートをした名刺大カードを配布した。これを収集することも楽しみの一つとなっていた。

②地元素材を使ったおやつを提供

登山では行動食が必須であるが、ここでも地元素材にこだわり、毎回10時頃におやつを提供をした。例として、「地元でとれた苺のゼリー」「ゆずピールチョコ」「じゃがいものトリュフ」「スイートポテト」など、スタッフの手造りスイーツであった。

③端材をつかった名札の配布

参加者からの要望もあり、参加者同士の交流のため、ガイドが身につけているものと同様の西川材の端材を使った名札を配布した。ヒモ部分はゴムとなっており、登山時に危険がないよう配慮した。バーニングペンで手書きした名札は、温かみ

があると、好評だった。

④プチみやげとメッセージカード

帰りはバスや電車をお見送りすることでツアー終了となるが、遠方からの参加者も少ないため、帰り道で退屈しないよう、地元店のクッキーなどを渡し、一言メッセージを添え、次回の参加への促しにつなげた。

⑤HP上での画像の提供

2年目よりホームページを立ち上げた。ツアー時にパスワードを伝え、ツアー当日の画像の提供を行った。

⑥ブログを通じた飯能の情報提供

2か月に一度のツアーであったため、その間の自然の変化やイベントの紹介、ツアーの下見の様子などの発信を随時行った。ブログを通じ、参加しなかった回の様子が分かり、仲間意識の醸成につながった。

参加者の中で、リピーターとなったゲストの中でも変化が見られた。当初はバーナーやコッヘルなどはスタッフが用意していたが、自身のものを購入し、各自で持参することが多くなり、スタッフの携行品が減少した。また、シリーズ開始時は、Gパンやスニーカーなど普段着での参加者が散見されたが、回を重ねるごとに機能性を重視したアウトドアウェアを身につけるようになった。登山・アウトドア用品店店員のスタッフが店に交渉し、本エコツアー限定の参加者割引を導入したことも大きいだろう。

以上のような取り組みを評価され、「ヤマムスメが行く」実行委員会は、2014年に環境省が主催する「生物多様性アクション賞2014」に入賞した。

飯能市では、2014年から優れたエコツアーを表彰する「エコツアー・アワード」を開始した。他の模範となるエコツアーを表彰することで、飯能市エコツーリズムの益々の発展に寄与することを目的とした表彰で、飯能市市長賞、環境省関東環境事務所所長賞、飯能市エコツーリズム推進協議会会長賞の3つの部門がある。2014年に行われた「ヤマムスメが行く」は荒天中止となった vol.8 を除く、vol.5, vol.6, vol.7, vol.9, vol.10がノミ

ネットされたが、受賞には至らなかった。シリーズ化してまだ時間が経過していなかったこと、はじめてのアワードということで、エコツーリズム開始当初から関わっている個人・団体を積極的に評価したためである。2016年2月17日に行われた「エコツアー・アワード2015」では vol.11がノミネートされ、飯能の自然環境の保全や生活文化、伝統文化の継承に大きく貢献したエコツアーを表彰する環境省関東環境事務所所長賞を受賞した。選考委員会によると、受賞理由として、登山・アウトドア用品の専門店員、森林インストラクターなど、山の専門家で全員女性のガイドによる女性限定のシリーズ型ツアーであること、里山を散策しながら、山の歩き方や動植物について解説したり、山頂では地元食材を用いた山ごはんを参加者と一緒に作って食べたりしたこと、リピーター率は8割と非常に高いこと、ツアー参加後に、オープンカレッジ（ガイド養成講座）を経てエコツアーの企画・運営側にも携わる参加者が出てくるなど、ツアーを通じて、自然の保全・再生に向けた新しい活動へ発展していることがあげられた¹⁰。「ヤマムスメが行く」を通じ、エコツアーガイドを志す人が生まれたことは、当初は想定していなかった成果で、うれしい誤算であるといえよう。

しかしながら、2016年3月現在、「ヤマムスメが行く」はメインガイドの一人が育児中であり、休止となっている。本シリーズはメインガイド2名により、その専門性を相互に補完しつつ行っており、どちらか1名が欠けてしまうと休止せざるを得なくなってしまう。シリーズ型のエコツアーを企画する時、その継続可能な体制づくりを考えておく必要があり、また、ガイドの専門性を高める人材育成を行う仕組みを構築することが必要である。

ガイドとしてある程度の収益が得られることも重要である。「ヤマムスメが行く」の場合、食材費と雑費、保険代を引いた額をガイド料としていたが、毎回1人当たり1万円ほどであった。飯能で行われている他のエコツアーのガイド料と比較すると、多いように思われる¹¹が、2回の下見と本番にかかる人件費としては少ないと言わざるを得ない。

若い人がガイドとして食べていける程度までに収益をあげたいところであるが、里地里山型エコツーリズムを推進している地域ではその実現までの道のりは険しい。飯能市の場合は既存のエコツアーとは別に、収益をあげることでできるエコツアーをいかに作りあげていくのか、また既存のものとうどう併存させていくのが、課題となっている。

VI おわりに

2016年8月11日より「山の日」が国民の祝日となり、近年の登山ブーム、健康ブームも相まって、今後ますます山への関心は高くなっていくであろう。森林が市域の76%を占め、首都圏から50キロほどと恵まれた立地の飯能市では、2017年開業予定の「北欧の雰囲気とムーミンの世界を体験できる施設メツァ」の建設や2020年の東京オリンピックに向け、どのように観光振興を進めて行くか、その的確なビジョンの策定が求められている。従来からあるイベント型一辺倒の観光をいかに転換し、エコツーリズムの概念に基づいた形で進化させていくかが課題である。

女性のための登山初心者向けエコツアーの企画・運営を行う「ヤマムスメが行く」シリーズは、飯能市のエコツアーの中で、シリーズ型で統一コンセプトをもったエコツアーとして、高い評価を得ていたが、注目すべき点は「飯能モデル」と称されるエコツーリズムの要素を具体的に取り込んで結果を出していることである。その要素の一つに「おもてなし」があるが、ここで行っていたことは決して難しいものではなく、地産地消にこだわったおやつや間伐材を利用した商品などは飯能ブランドづくりへと応用ができるし、HP上での画像の提供やブログなどを通じた情報提供は既存のHPやブログ、Facebook などを通じて実施可能であるなど、エコツアーだけで留まるものではなく、汎用性が高いものばかりである。ないものねだりをするのではなく、既存のこと、ものをうまく転換、改善しつつ、相乗効果を意識しながら、磨きをかけていくことが重要なのであり、こうした努力を継続していくことで本当の意味での「飯

能モデル」となりえるのではないか。こうしたエコツーリズムの考え方に基づいた、新たなエコツアーの企画・運営を期待したい。

謝辞

シリーズ型エコツアー「ヤマムスメが行く」実施にあたり、飯能市観光・エコツーリズム推進課様、カフェ紗蔵様、さわらびの湯様、中村貢磁・千代子ご夫妻様、浅見茶屋様、休暇村奥武蔵様、マキノキ果樹園様、カフェギャラリー吾野宿様、町井雄一郎・千波ご夫妻様に多大なるご協力をいただきました。また、本稿作成にあたり、飯能市エコツーリズム活動市民の会の皆さまにお世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

なお、本稿で使用している写真やアンケートは、本人の掲載承諾を得ています。

注

¹ 2016年1月18日付の朝日新聞2面の「ひと」欄に筆者がとりあげられ、ここで初めて「飯能モデル」という言葉が使われた。同年2月4日に放送されたNHK 首都圏ネットワークで飯能市のエコツーリズムが取り上げられ、ここでも先進的な里地里山型のエコツーリズムの形態を示す言葉として使われている。

² 埼玉県ホームページによる。

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0806/kankoutoukei2.html>

³ 1年に一回以上登山をした人を指す。

⁴ 「釣りガール」、「狩りガール」などがあげられる。

⁵ 飯能市エコツーリズム推進協議会が実施する人材育成のための講座であるオープンカレッジに参加し、修了したものの中で、希望者が入ることのできる任意団体。2015年12月現在で100名ほどの登録があるが、活動している実数は20名ほどである。

⁶ vol.3については、当初13名の参加者を予定していたが、体調不良などの理由で、キャンセルが相次ぎ、結果として8名となっている。

⁷ 2015年11月で22回目を迎えた南高麗地区で実施されるエコツアー。飯能市のエコツアー参加者の約半数をここが占める。「秋のお散歩マーケット」は2015年度エコツアー・アワード、飯能市長賞を受賞した。

⁸ アンケートの回収枚数が12であるため、参加者数合計と合わない。

⁹ バーニャカウダとは、イタリア北部ピエモンテ州の料理で、オリーブオイルにニンニクやアンチヨビを加え熱したソースに、野菜やパンなどを浸して食べる。

¹⁰ エコツアー・アワード2015 受賞式配布資料による。

¹¹ 飯能市でエコツアーガイドを行っている方11名にヒアリングしたところ、ガイド料について一回当たり0～1000円と答えた方が1名、1000～2000円と答えた方が5名、2000～3000円と答えた方が5名となっている。

参考文献

佐々木浩也 (2014)「登山の現状と動向、そして今後～雑誌『ランドネ』創刊から四年を巡って～」、国立公園 725 , pp.7-10.

飯能市エコツーリズム推進協議会 (2015)『平成26年度飯能市エコツーリズム推進事業 報告書』142p.